
三人で旅行に...

石子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三人で旅行に…

【Nコード】

N7117D

【作者名】

石子

【あらすじ】

仲の良い友達と旅行に出発した郁。いつものように賑やかにおしゃべりをしていたはずだが、なぜか違和感が…

私は、会社の同僚二人と車で旅行に出発した。
二人とも気の置けない友達だ。

計画を立ててくれたのは、今車を運転している麻子である。よく
気の利く子で、仕事もテキパキこなすが遊びの計画もぬかりない。
そして、助手席に座っているのが愛美。おっとりとした性格で、
自分で計画を立てるのは苦手、というタイプだがそこが麻子と馬が
合うようだった。

「ごめんねえ。わたし運転できなくて。麻子ちゃんはずっと運転し
てて大丈夫？」

と愛美が心配そうに言ったので、

「麻子、運転疲れたら言ってね。代わるから」

私も後部座席から呼びかけた。

まだ出発したばかりだが、確かにいつも頼りっぱなしというのも
気が引ける。

「平気。わたし運転好きだから気にしないでいいよ」

あっさりと言ってくれた。しばらく運転は任せておいていいだろ
う。

「ねえねえ。今日泊まる旅館の写真がこのガイドブックにも載って
るんだけどすごい綺麗だよ」

嬉しそうに愛美が言う。どうやらガイドブックを見ているようだ。
「車の中で読んでたら気分悪くなるわよ」

しょうがないなあと思いながら、私は言った。以前も車の中で何
かを読んでいた事があり、気分の悪くなった愛美は途中で車を止め
てもらってしばらく休んだり、という騒動を起こしている。

「愛美。前にしんどくなって、皆に迷惑かけたこと忘れたの？」

麻子も私と同じ事を思い出していたらしい。

「そつか。えへへ。忘れてたよ。でもわたしいつもは車に酔わないんだけどなあ」

懲りないことを言う愛美は、名残惜しそうにまだひざの上に広げているガイドブックを見ている。

「ダメ」

ちょうど赤信号で停まった時、麻子が横から愛美のガイドブックを取り上げると、後ろに投げて寄越した。

ちょうど愛美が見ていたページが開かれたまま私の横にぱさりと落ちる。

「あゝ！ 麻子ちゃんひどいなあ。今から旅館の周りの観光地を見るつもりだったのに」

愛美は抗議の声をあげるが、もちろん笑い混じりでたいして怒っているわけではない。

「没収ね」

私も笑いながら言った。

「観光に行くところは、私が調べてるわよ。ちゃんと予定を言ったでしょう？」

麻子はやれやれという感じがした。

「そうなんだけど、見てると楽しいんだもん。」

……気持ちわかる。実は私も、思わず愛美のガイドブックを眺めていたりする。手に取ると私まで目がはなせなくなりそうなので、ちょうど開いていたページを上から見ているだけだが。

出発前にも麻子がパンフやらを見せてくれていたが、改めてガイドブックの写真を見ると、やはりわくわくしてしまうものだ。

「それにしても旅行なんてほんと久しぶり。なかなか休みも合わないしね」

「そうよね、うちは部署が違々と休みを合わせるのも難しいのよね」
麻子の言葉に、私も相槌を打つ。

「うん……。あんなこともあったしね……」

愛美はしばらく黙っていたが、独り言のように呟いた。

あんなこと……？

前を向いている愛美の表情は見えないが、寂しそうな顔をしているように感じられた。

なんだろう？

思い当たらない。最近、仕事帰りに皆で飲みに行ったりもしないしなあ。なんかあったのかも知れない。聞くべきか聞かざるべきか……。

「愛美、なんかあった？」

「そのことは、もう言わないのっ！」

あ。麻子の言葉と思いつきりかぶっちゃったわ。

麻子は何か知ってるみたいだ。

「ご……ごめん！ ついつ……。もう、やだなあ……。わたしったらこの話はしないって言ったのにね。きっと、郁ちゃんにも気を使わせちゃうよね。ホントにごめん……」

愛美は慌てて取り繕う。ちなみに、郁というのが私の名前だ。

「別にいいけど……」

気になるが、無理に聞き出すこともない。言いたくなったら言うてくれるだろう。ずっとそういう付き合いをしてきたしね。

ちよつと沈黙……。

そんな時、麻子がさりげなく音楽をかけてくれた。

あ……。この曲……。

「愛美、好きでしょこの歌。郁も好きって言ってたよね。これ聴いて元気に……なるかどうかかわかないけど、でも気まずい感じになるのはやめようよ」

麻子はさすがだなあ。

それは私の学生時代に流行った曲で、その歌の話題で愛美と盛り上がったことがある。

愛美はそれを聴いて、「麻子ちゃん……。ありがと……」なんて言いながらちよつと涙ぐんでいるようだ。

「はいはい。泣かないの。とりあえず、三人で楽しい旅にしようよ」
麻子がその場をまとめ、しばらくは曲を聴きながら三人それぞれ景色を眺めていた。

「もうすぐよ」

麻子が言った。

私は、何のことかと怪訝に思う。

まだ出発してからそんなに走っていない。目的地には程遠いはずだ。

「何がもうすぐなの？」

私は尋ねるが、聞こえなかったのか答えは返ってこない。

そうこうしているうちに車は道端に寄って、停まった。

なんでこんなところで停まるの？

と聞く前に、見覚えのある人が車に駆け寄ってくるのが視界に入った。

「こつちこつち！」

窓を開け、麻子が手を振る。

確かあれは会社の後輩のさやかちゃん？

こんな所で待ち合わせなんて聞いてない。一緒に行くのは構わないが……

「お待たせしました！」

……私が戸惑っている間に、さやかちゃんは車のドアを開けて乗り込んできた。

「さやかちゃんの家ってこの辺なんだねえ。会社から遠いでしょう？」

愛美も、さやかちゃんが来る事は知っていたようだ。

「ちょっと、みんな！ 私、さやかちゃんが一緒に来るって聞いてなかったわよ！ そりゃ、人数が多い方が楽しいしさやかちゃんなら大歓迎だけど、一言くらい教えといてよね！」

きつと、私には言い忘れてたんだわ。

もちろんそんなことで怒るつもりもないけど、ちょっと文句を言ってみた。

「うーん。確かに通勤時間は長いんですけど、電車の乗り継ぎがないので大変じゃあないですよ」

笑顔で愛美の質問に答えるさやかちゃん。

あれ……？

「ねえ、私の話聞いている？」

「そつか。乗り継ぎがなかったら電車の中で本とかゆっくり読めるからいいかもね」

「ねえ！ 聞いている？」

「麻子ちゃんは読書好きだもんねえ」

……こんなに近くから呼び掛けても誰も答えない。 誰とも目が合わない。

いたずら……ではない。

私のことが見えていない……？

声が聞こえていない……？

背中を、嫌な汗が伝う。

今日の会話を思い返してみた……。

最初から私の声は誰にも聞こえていなかった……？

「わたしがこの旅行に参加しちゃって、よかったんでしょうか？」
「さやかちゃん。来てくれて、感謝してるのはこっちの方だよ。……ホントはすごく迷ったんだよね。さやかちゃんを誘うかどうか。それに旅行を決行するかどうかも」

「そうだよお。前に旅行を計画してたときに、郁ちゃんが交通事故で亡くなった事はすごいショックで、もう旅行なんて絶対しないって思ったんだけどね。郁ちゃんならそんなの絶対嫌がる、みんなで楽しく旅行したほうが郁ちゃんも喜ぶはずだ、って麻子ちゃんに言われて……」

「そうそう。その時の旅行はもちろんキャンセルしたけど、気持ちの区切りのためにもまた同じような行程で計画立てて、郁とも仲の良かったさやかちゃんを誘ったんだ」

「そうですか。あれから随分月日も経ちましたもんね。きっと、郁さんもわたしたちが楽しめば喜んでくれますよね」

……………。

車は静かに、また走り出した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7117d/>

三人で旅行に...

2010年10月8日15時55分発行